

町の上に高く柱がそびえ、その上に幸福の王子のぞうが立っていました。王子のぞうは全体をうすいじゅん金でおおわれ、目は二つのかがやくサファイアで、王子のけんには大きな赤いルビーが光っていました。王子はみんなのじまんでした。「風見鳥と同じくらいに美しい。もっとも風見鳥ほど便利じゃないがね」と、一人の市会議員が言いました。「どうしてあの幸福の王子みたいにちゃんとできないの」と、月がほしいと泣いているおさない男の子に、お母さんが聞きました。「幸福の王子は決して何かをほしがって泣いたりしないのよ」「この世界の中にも、本当に幸福な人がいる、というのはうれしいことだ」失望した男が、このすばらしいぞうを見つめてつぶやきました。「天使のようだね」と、明るい赤のマントときれいな白いそでなしドレスを着た子どもたちがせい堂から出てきて言いました。「どうしてそのようなことがわかるのか」と数学の先生がいました。「天使など見たことがないのに」「ああ、でも見たことはありますよ。ゆめの中で」と子どもたちは答えました。すると数学の先生はまゆをひそめてとてもきびしい顔つきをしました。それは、かれは子どもたちがゆめを見ることはよろしくないと考えていたからです。あるばん、その町に小さなツバメが飛んできました。友だちはすでに六週間前にエジプトに出発していましたが、そのツバメは残っていました。かれは最高にきれいなアシにこいをしていました。そして